
立命館大学人間科学研究所の開設にあたって

人間科学研究所 所長 齋藤 稔正

昨年度10周年を迎えた教育科学研究所は、定例の年度事業に加えて、哲学者の梅原猛氏による記念講演会などの特別企画も無事成功裏に終え、本研究所の活動を学内外に大きくアピールすることができた。

一方、本学での長期計画では、設置が構想されている人間分野の新学科、新専攻、新大学院などと連携した基礎研究部門の一層の展開を探る、人間科学全般を包括するような研究機関が要請されるにいたった。その実現への具体的取組みとして、衣笠総合研究機構は、教育科学研究所を発展的に改組、拡大して、人間科学研究所を本年4月1日に発足させ、さらに「文部省学術フロンティア推進事業」のプロジェクトの助成を獲得することに成功した。現在、衣笠中央グラウンドを緑地化する大掛かりな事業が進められているが、来年3月頃には、その北西の一隅に人間科学研究所の建物が完成する予定である。

折しも、本学は今年で開学100周年を迎える記念すべき年であり、それにふさわしい事業といえよう。本研究所には心理、教育、福祉などの領域の基礎研究だけでなく、人間科学全般に及ぶ臨床、応用領域で活躍を希望する社会人の養成といった数学の一端を担うことも要請されている。

ところで、今日の科学技術の発展は、正に日進月歩であり、その勢いは止まるところを知らないほどである。そして、われわれ現代人はその進歩の恩恵に浴し、物質的豊かさを享受している。しかし、その一方で異常なほどの速度で過剰に飛び交う情報に適応が困難になり、幸福なはずの現代社会での生活には大きな歪みが生じている。わが国の社会状況をみれば明らかなように、「心の歪み」を象徴するような病理的な諸問題が噴出している。たまたま日本経済の不況の時期も相俟って、人心の荒廃は目を覆うばかりである。とりわけ青少年の、学校教育現場におけるいじめ、不登校、非行などに加えて、近年は学外での凄惨な暴力や殺人などの事件も頻発している。もちろん、このように荒廃した人心に起因する諸問題の解決には、関係方面からのいろいろな努力がなされている。また、わが国では史上初めての未曾有の高齢化社会を迎えている。そして今後も高齢者の数は益々増加してゆくとのことである。こうした高齢者の介護の問題は社会的な病理現象とは異なるが、経済的な援助も含めてどのような介護をしていったらよいのかなどについては、多様な視点から研究してゆく必要がある。こうした社会的要請に対して、本研究所は学術的な研究結果を踏まえた有効な示唆や実践的な援助を通じて積極的に何らかの貢献をしてゆかねばなるまい。そのためには、従来の視点を越えた新たなパラダイムにより人間を全体的、総合的に探求するような学際的な研究が必要であろう。もちろん、

過去10年間に蓄積されてきた教育科学研究所の知的所産を考慮しつつ、新たな研究を展開してゆく必要がある。教育科学研究所の時から継続のプロジェクトに、以下の新たなプロジェクトが加えられた。現在、学術フロンティアに拘わるプロジェクトには、①ヒューマン・サービスを中心としたコア・プロジェクト、②援助技術に関するバリアー・フリープロジェクト、③家族病理に関する家族プロジェクト、④高齢者福祉についてのライフ・デザイン・プロジェクト、⑤発達心理に拘わるこどもプロジェクト、⑥地域と福祉の問題を扱う福祉情報プロジェクト、⑦医療と地域についてのコミュニティ・ケア・プロジェクトの7つのテーマがあり現在進行中である。

いずれにしても、20世紀最後の記念すべき年に、このような来世紀を展望する新たな構想に基づいた人間科学の研究所が発足したことは、本学の将来への発展を予感させるにふさわしい事業であり、慶賀の至りである。しかし、現代社会では様々な分野で旧来の発想に行詰まりが生じており、21世紀にむけて新たなパラダイムへのシフトが強く求められている。人間科学の研究においても、改めて「心の本性」に視点を据えた総合的な人間観が要請されているといえよう。

研究所の建物の素晴らしいハード・ウェアが作られているが、そこにいかなるソフト・ウェアを創生するかが、研究所の今後の命運を担うことになる。個性的で、特色のある研究を通じて、本学の発展に寄与したい。

